農政産業観光委員会　県内調査活動状況

１　調　査　日　　平成３０年１１月８日（木）

２　委員出席者（８名）
　委 員 長　　永井　学
　副委員長　　乙黒　泰樹
　委　　員　　前島　茂松　　山田　一功　　遠藤　　浩　　望月　利樹
　　上田　　仁　　山田　七穂

　委員欠席者　　安本美紀

３　調査先及び調査内容

（１）【意見交換会】

①　出席者　産業技術短期大学校の学生の方々

②　内容　「山梨で働くことの魅力と自らのキャリア形成について」

○主な意見

議　員）　観光ビジネス科の皆さんに伺うが、今、海外から日本、山梨にも、お客さんが来る。そういう人たちに、ホスピタリティ、おもてなしするためには、それなりの外国語のスキルが必要になってくると思うが、そういった、外国人に対するホスピタリティというのを、どのように学んでいるのか。

出席者）　英語に関しては、週に２回ほど授業が行われ、そちらで文法や語彙力を身につけている。
　また、外国人に対しての接客というか、対応であるが、「インバウンド」という授業が組み込まれており、実際に、全員生徒が、河口湖や、浅草のほうで、外国人を対象に、アンケートを実施しており、外国人の対応というものは、実際にアンケートを通して身につけている。そのアンケートの中で、これはどこにあるかと英語で聞かれた際にも、英語で一応対応はできるほどの語学力は身につけられるカリキュラムは組まれている。

議　員）　観光ビジネス科であるが、他科に比べて県外就職率が高いが、今山梨県というのは、観光立県として何とか未来へ進んでいこうということであるが、この県内に就職が少ない理由というか、どうすればこの県内就職率が高まると考えているか。

出席者）　個人的な意見と、僕が今学習している環境からであるが、都内の先輩方が就職しているホテルを見ると、ホテルで就職するというのは収入などを除いて、自分がこういうホテルで働いているぞという誇りというか、そういうのを大事にされると思う。そういうふうにみると、この山梨県でいうと、有名なホテルがあるとしても、リゾート地であるとか、河口湖のほうであったりとか、ある程度観光

が発達している、誘致しようとしているところばかりなので、県内に就職するとしたら、学生が就職した際に誇りを持てるようなホテルが山梨県にあることが大事だと思うので、ちょっと漠然とした感じだが、有名なホテルが山梨県に建てたいと思うような工夫を、県の方にはしていただきたいと思う。

議　員）　有名なホテル、ヒルトンとかそういうホテルが山梨にあれば、ということだということはわかる。

議　員）　観光を発展させるためには、山梨のいいところを、海外や国内、県外に向けて、情報発信をしていくことがすごく重要だと思うが、私も県外での山梨県の情報発信力は非常に弱いと思っている。

情報技術科の皆さんに伺うが、海外への情報の発信も当然勉強していると思うが、観光や農業などというちょっと違う分野のものを、いかに拾い上げて海外へ情報発信していくことをどう思っているのか。

議　員）　漠然としているが、わかるか。もともとそういう勉強をしているのか。プログラムとかそういうことをやっているのか。

出席者）　実際、僕たちが学んでいるのは、わかりやすく言うと、主にソフトを開発することで、情報の発信はまたちょっと違う。

議　員）　エンジニアのほうなので、ちょっと違うかもしれない。

議　員）　この中で、県外に就職が内定している方はいるのか。ちょっと１人ずつ、決めた理由を聞きたい。

出席者）　私は都内のホテルに就職の内定をいただいたが、先ほど説明したように、やはり、県内に有名なホテルがないので、県外に出たということと、２０２０年のオリンピックに向けて、海外の人への対応をしたいという意味で、山梨県よりは他の県のほうが、外国人が訪れる割合が高いのかなと思い、県外での就職を考えた。

出席者）　私は、都内のレストランの会社に内定をいただいている。その会社自体は、イオンモールの中にも店舗があるが、３店舗しかないと言われ、そこも一応、希望は出せるが、そこで新入社員が、間に合っていると言われたら、もうそこまでだと言われたので、妥協もありつつと言うか、自分としては県内も考えていたが、そういう都合で都内に就職する。

出席者）　私は、エレベーターやエスカレーターの関係の会社に就職が決まっているが、就活のときに、県内か、県外かすごく自分の中でも葛藤があった。そのときに、進路の先生から今の企業を勧めていただき、話を聞いて、その企業は海外にも結構支店があり、そこに就職ができれば、自分の中で、自分の世界が広がるのかなと思った。

山梨もめちゃくちゃいいところで、実家もあるし、安心して暮らせる場所ではあるが、自分の視野を広げたいというか、もっと、いろいろなことを知って、ものごとを別の方向から考えるようになりたいというのもあり、今の企業が一番自分はいいかなと思った。

出席者）　私の場合は、山梨県に魅力がないということではなく、ただ単に外の世界に行きたいということで、県外就職に決めた。

出席者）　車やバイクの大部分の部品をつくりたいと思っていたので、その関係を山梨県の企業でやっているところを調べてみたら、ないというわけではないかもしれないが、見つからなかったので、県外に就職した。

出席者）　私も、特に大きな理由があるわけではないが、県外の会社に行ってみたい、県内にいいところがないわけじゃなくて、とりあえず出てみたいと思って、就職先を選んだ。

出席者）　自分は都内に就職内定をもらっているが、理由としては複数あるが、一つは、情報業界では、新しい技術というのは非常に短いスパンで発表されているので、そういったものが一番早く入るのがやはり東京だったということと、自分自身、新しい技術というのにとても興味があって、そういったものを間近で見ていきたいと思った。新しい技術が採用されたり、使われたりするのは、大体東京や、大都市だったりするので、そういったものを近くで見ていきたいと思い、都内に就職を希望した。

出席者）　私も、県内で一応探してはみた。会社がないわけではないが、やはり、県内の会社だと、例えば出張が多かったり、客先に常駐してプログラミングという会社も多く、私はもともと就職した会社内で働きたいというのが希望であったので、まず客先に行かない会社ということで、探した。

　あと一つ大きいのは、交通の面で、県内企業だとどうしても車が必要になる。車で通勤するというのは厳しいかなというのがあった。あとは、やはり新しい技術は、東京に入るという部分もあり、東京に行ったほうが、自分の可能性が広がるかなというのも大きかった。

出席者）　私も、山梨県内で仕事を探していなかったわけではなくて、山梨県内のことも考えながら、いろいろ探した。県内に就職したほうが、実際、実家も山梨にあるので、楽に生活できるし、お金も貯めやすいというのもあるとは思うが、自分自身を育てたかった。県外に住めば、必ず一人暮らしをしなければならなくて、そこでいろいろ学ばなければいけないこともあると思う。そういったことを実家暮らしだと学べない、学べたとしても少しぐらいしか学べないと思ったので、県外就職を希望した。

議　員）　皆さん、志や考えがあってということで、大変感動した。

　童謡の「ふるさと」の３番に、「志を果たしていつの日にか帰らん」というのがある。ぜひ、この、山梨を思い出して、そしてそれが皆さんの将来のために役立つということを考えておいていただきたい。

議　員）　全ての条件が山梨に整っていれば、できれば山梨で就職したかったという方はいるか。

（学生挙手）

半分ぐらい。では、ほかの方は、山梨に、どうしてもここに住みたかったというわけではないということか。

　では、もう一点聞きたいが、将来さまざまな経験をして、山梨に帰ってきたいと思っている方。

（学生挙手）

やはりそんなに多くない。

では、山梨県人として、山梨とずっとつながっていたいと思っている方。

（学生挙手）

これは結構いる。

　これからは、山梨県も皆さんのニーズというか、就職のニーズというのを細かいところまで調査をして、県内就職、もしくは出て行った方が山梨県内に戻っていただけるような、そういう取り組みをしていきたいと思っているし、そういったことで、山梨県も活性化をしていきたいと思っているので、またさまざまな意見を聞かせてほしい。

議　員）　仲間同士の交流というのはかなりあるのか。というのは、年を取ったから言うのだが、今から皆さんは、おのおの１人になって、どこかの会社へ行くと、いろいろなことに出会う。そのときに、相談する人はその会社にもいるが、会社とは別の仲間同士が非常に大事だと思う。この学校も、仲間とか、それから先輩後輩とか、そういう社会をつくっていくことが大事だ。

　どこの世界へ行っても、きっと人と人のつながりが、新しいビジネスのチャンスもつくってくれるし、課題も解決してくれると思う。

　そこで、今、仲間同士のコミュニケーションが大事だと思うが、それをどんなふうにやっているのか、または、考えているか。

議　員）　各科、１人ずつくらい、話を伺いたい。

出席者）　就職した後、観光ビジネス科は、県外就職者が多いので、ばらばらになる確率は高い。ホテルの企業説明会などは、基本的にいいところしか教えてくれないが、実際に先輩方が都内にいて、こういうところがよくないとか、そういうのを教えてもらうなどといった交流が、先輩方とはある。

　同級生は、今からなので、ちょっと推測になってしまうが、ソーシャルネットワーク等での交流、例えば、個人的に自分の勤めているホテルを写真に上げてＰＲしたりだとか、そういうのも、自慢じゃないが、自分がこんなところで働いているみたいなのも、おもしろいかと思う。

出席者）　今ここにいる生産技術科の３人は、この学校でやっているサークルに入っていて、主に昼休みに、バスケなどの球技を、スポーツを通して他学科と交流をしている。スポーツを通していくと、ここから仲が深まって、授業の話や趣味など、どんどんプライベートの話になっていくので、それで仲よくなっていけていると思う。

出席者）　電子技術科は、昼にトランプなどをして遊んでいて、そのときに、世間話やら、たわいのない話をして、友情を深めている。

出席者）　情報技術科としてというよりは、僕個人の話になってしまうが、僕も個人的に、今、生産技術科の方が言ったのと同じように、サークルに属している。そのサークルの中で、３人とともに運動をして、そのサークルだけの人間ではなくても、実際スポーツをすると仲が深まるというのは、一番楽な方法だと思う。あと、そこからコミュニティを広げていけるほうが大事だと考えている。

　誰かに紹介してもらったり、積極的に声をかけるなど、そういった基本的なことだが、そういったことが、コミュニティを広げていって、自分自身が困ったときに

助けてもらえる手をふやしていけるのではないかと思う。

議　員）　人と人のつながりをもって、課題にぶつかったときには、解決してもらうようなことってすごく大事だと思うので、同期の皆さんは同期で、もちろん仲良くして、連絡をとれるようにしておいて、さらに学校の仕組みとしても、卒業生などちゃんと上とつながるような学校として、みんなで１人を助けるみたいな学校で動いていけば大変いいかなと思う。

議　員）　今、県内に就職をしたり、県外に行く方がいっぱいいる中で、やはりまずは企業に就職をして、企業の一員としてこれから働いていくと思うが、その中で、将来的に独立して、もちろん職種によっていろいろ形態は変わってくると思うが、ずっと企業の中で働いていきたいか、それとも、またいずれは独立することをちょっと夢に思っている方がいるのかを聞きたい。手を挙げていただければ。

（学生挙手なし）

私も高校を卒業後、大学も就職も山梨を出ていきたい、広い世界でいろいろ勉強したり、遊んだりしたいということで、東京に行きたい一心で、出ていったが、その後、いろいろ一通り経験し、結婚したり子供を育てたりってなると、やはり山梨がいいなと思うようになり、帰ってきたいなと自然と思うようになった。同世代を見ても、結構東京へ行って戻ってきていた。ただ就職先があるかというと、難しい部分もあったりするが、いろいろなライフステージの変化に伴って、いずれ、山梨に帰ってきていただいたらありがたい。

例えば、今の段階でそういうニーズがないとしても、将来的に独立したり、山梨で同じ仕事ができるという選択肢があれば、帰ってきたいというのは、先ほど質問の中でもちらほらいたので、多分そういうニーズを整えていくのが大事なのかなと思う。

もし、将来的に独立して、山梨じゃなくても、１人でやっていくのもいいかなと、今、ちょっと私の話を聞いて思った人がいたら手を挙げてもらいたい。

（学生挙手なし）

まだ、ない。やはり企業の中がいいということか。

議　員）　どう若い人たちに定住してもらえるかというテーマで、いつも委員会でも議論を深めているところである。簡単に統計の話をすると、１５歳から２９歳までの若い人たちの、県内に流入してくる人口と、流出する人口というのは、大体このところ１年に２千人か、その辺の平均値で、県外に出て行く人のほうが多いという状況で、山梨の将来というのを考えると、私たち議会としては、とても深刻である。この割合で、毎年毎年、県外に流出傾向が続いていくということは、山梨県の産業、あらゆる分野が縮小し、衰弱をしていってしまうという、危機感を私たちは持っている。

大都市圏で風に当たりたいと、大変そういう若い人たちの傾向というのは、避けられないと思うが、ぜひふるさとにまた帰ってくれるような、我々も努力しなければならないが、お願いをしたいと思っている。

そこで、どういう方面へ皆さん方が就職をされようとしている傾向があるかということを聞きたいが、東京を中心として、首都圏に就職が決まっている人たちがどのくらいの割合になるか、ちょっと手を挙げてもらいたい。東京、埼玉、千葉など首都圏。

（学生挙手）

その他の方々。例えば長野とか、あるいは静岡とか、そういう方面の方はいるか。

（学生挙手）

やはり圧倒的に首都圏である。

議　員）　私は、皆さんに企業経営者の立場から、意見を言わせてもらう。せっかくこの２年間で、皆さんが学んだスキル自体は、それは非常に大事なことだが、実際に企業というのは、皆さんのスキルを、必ずしも１００％生かせられない場面も当然あるし、そういうときに、挫折を味わうと思う。そのときに、どうやって立ち直るかということを、転ばぬ先の杖じゃなくて、実際転んでみなければ、これはわからない。

皆さん世代でちょっと心配なのは、皆さんがそうだということではないが、当たり前のことを当たり前にするってよく言うが、その当たり前の価値観がちょっと違う。例えば、皆さんが具合が悪くて、会社を休むとき、自分で今日は具合が悪いので休みますと始業前に伝える。多分、これは当たり前である。しかし、意外にそういうことができない世代になりつつあるので、そういうところを心配している。出勤していないからと思って電話をすれば、子供が具合が悪いと、親が出る。ぜひ、そういう、皆さんがそうだとは言わないが、そういうことのないように、お願いをしたい。

また、ぜひ、小さな成功体験を積み重ねていって、やり抜くということをしてもらいたいと思う。ちょっと古っぽいと、皆さんは思うかもしれないが、まずは企業の経営者というのは、皆さん何十人と来たら、申しわけないが、個々では見ないので、２０人採ったら、この中で５人生き残ってくれればいい、３年生き残ってくれればいいくらいの、そういう感覚で見ている。だからやはり、その中から生き残っていくというのは、どういうことかというと、一つの例で言うと、働き方改革とかいろいろ言われているが、やはり始業前に、先輩より早く行く、会社に出勤する。ずっとやれとは言わない。半年間、それを続ける。もうそこから、上司の見方が違って、その時点から目をかけてくれるようになってくる。

今、働き方改革といって、労働者を守っているように思う働き方改革は、実は、これは、表と裏の両面がある。やはりこれまでの日本の企業というのは、労働者の残業や、そういう頑張りによって、今日の日本になったが、働き過ぎだとか、日本とやったらとてもかなわないということで、欧米から欧米的な働き方を強制されるような状況になって、日本人の、日本の企業のよさが、だんだん失われつつある。このまま２時間ぐらい残業したほうが効率がいいという場合があっても、時間が来ればやめなければということもあり、非常に難しい。企業側も難しいし、働く皆さんも働きにくいような場面になっている。

ただ、そういうルールの中で、これから皆さんの力を発揮していかなければならないためには、一つの例としては、先輩より早く行く、半年間やってみよう、３カ月でもいい。それだけでも違うと思うので、そういうことを、ぜひ、実行してみたらどうかと思って、そんな話をさせていただいた。一応経営者からの意見ということで、今日のところはお聞きいただければと思う。ぜひ皆さん、頑張っていただきたい。エールを贈りたい。

議　員）　先ほどは県外に出る方の話を聞いたが、県内に就職をされる方が、どうして県内に就職を決めたのか。実家があるとか、いろいろ理由はあると思うが、県内に就職を決めた理由を伺いたい。

出席者）　私の場合は、インターンシップで県外にも会社を見に行き、基本給は、やはり県外のほうがちょっと高かったりもしたが、自分の中では、何を重点的に置いているかというと、仕事が終わった後の時間を大切にしたいと思っていて、そういうことを考えたときに、地元に残って友達と会ったり、お酒を飲んだりとかと

いう時間を大切にしたいと考えた。もちろん実家もある。そういう自分の中での時間の使い方を考えたときに、地元で気心の知れた仲間と大切な時間を過ごしたいと考えたので、地元に就職を決めた。

出席者）　私の場合は、もともと父親との約束で、この学校に進学したときに、進学したら、その先の就職は、家を自分が見るということで、地元就職を自分の中で考えていた。そのときに親に高校を出てすぐに就職するよりは、ちょっとだけ勉強をして、好きな時間を過ごしてもいいのではないかということで、今の短大に入らせてもらった。それで２年間学ぶ中で、やはり県外就職も自分の中ではいいものがあると思ったが、でも探すと山梨でも似たことをやっている企業もあったので、だったら、実家で暮らしながら地元で就職していきたいと思った。

議　員）　高校卒業してすぐ就職しないで、ここに入って２年間やってよかったか。

出席者）　高校で学んできて、ちょっと中途半端で終わっちゃった部分もあったので、大学に入ってから高校で習ったことのその先が学べたので、自分の中ではかなり充実した時間になった。

出席者）　自分の場合は、最初から県外へ行くという意思はなくて、県内就職で今のところはやっていきたいと思って、それで県内で就職した。友達との関係を長く保っておきたい、そのほうが自分的にも楽しいと思ったので、そうした。

出席者）　自分の場合は、最初、就職は両親も自分の好きなようにしてもよいと言われたので、県内か、県外か、どっちにしようかと悩んでいたが、いろんな企業ガイダンスなどに参加していくうちに、今の自分の就職先が決まった会社と出会い、そこでならいいかなという考えもあって、県内就職にした。また、私はこの学校で学ぶにつれて、ものづくりを仕事にしたいと考えていたので、その会社も、ものづくり系の会社なので、自分に合っていると思った。

議　員）　ガイダンスに参加をしていくうちに、徐々に、合う企業が県内にあって、これだって思ったということか。

出席者）　そうである。

出席者）　私は、本当に、県外は考えていなくて、実家から通えればいいと思って、県内でできるやりたい仕事を探したら、ちょうどあったので、それで県内にした。

議　員）　やはり、県内に残る理由というのは、今伺っていて、それぞれあるということで、非常に参考になった。多分、ヒントがあると思う。
　観光ビジネス科の資料にある大学生観光まちづくりコンテストの本選というのは、全国で大会があるのか。

出席者）　自分たちが出場した年は、全国の、部門がいっぱいある中で、多摩川ステージに出場した。

議　員）　その前の年は山梨県知事賞ってことは、山梨県の大会があって、全国もあったのか。

出席者）　たしかそうである。

議　員）　いろんな部門があるわけか。

出席者）　毎年４ステージずつあり、僕たちの一個前と、その前までは山梨ステージがあって、それに出場していたが、僕たちの年になったら山梨ステージがなくなり、インフラツール、全国ステージになり、それに参加させていただいた。

議　員）　こういう、皆さんが提案するまちづくりのような発表の場、こういうことができますみたいのは、ホームページなどで見られるのか。

出席者）　自分たちは本選に今まで出場したが、受賞のほうができなかった。資料のほうだが、日経カレッジという、日本経済新聞の大学生向けのモバイルのところに、自分たちのプランのほうは投稿させていただいた。

議　員）　では、今度見させていただく。
　政策提言ではないが、こんな山梨だったらいいなというような部分で何かないか。各科１人ずつぐらいで、例えば、自分の勉強しているところで、こんな観光だったら山梨がもっといいのにとか、生産技術科の人だったら、こんなものづくりとか、そういった何か自分の学んでいるところであれば。

出席者）　観光ビジネス科で勉強させてもらって、「郷土観光論」というコマがあり、僕たちが入学したころよりは山梨県に詳しくなって、知らなかった山梨県をいっぱい学べて、入学したときより好きになったというか、魅力がいっぱいあると思う。それが、県外の方に知られていない。
　甲府の中心が、わかりやすく言うと、昭和町方面のほうに人が引っ張られてしまっていると思うので、中心街に人が集まるような甲府に、山梨になったら、またそこから広がっていくのではないかと思う。

出席者）　自分たちが勉強していることだと、結構いい技術を持った企業が多かったり、首都圏に近く、立地がすごいいいと思うので、その辺については、特にまだわからない部分もあるが、特に、今、自分が感じていることはない。
　やはりリニアがつながると思うが、リニアが通る地域が、結構まだ、畑が多いので、そちらにも何か商業施設じゃないが、家族で遊びに行こうよみたいに思えるような何かがあれば、リニアが通ったときに、じゃあ山梨にあれがあるから遊びに行こうとなって、もっと観光客が増えてくれるかなと思う。

議　員）　アミューズメントパークとかか。

出席者）　そんな感じである。

出席者）　山梨は、遊ぶところが多いわけではないが、それを増やしたほうが人も来ると思う。

議　員）　遊ぶ場所というのは、ちなみに遊園地やボウリング場みたいなものか。

出席者）　さっき出た、アミューズメントだったりとか、そんなところである。

出席者）　個人的な内容だが、山梨は、首都圏などに比べて、交通の便があまりよくない。山梨は車社会と言われ、車がないと移動ができない。自転車でも生活は不便だが困らないとは思うが、僕の住んでいるところは坂道がすごく多いところで、自転車で移動となると、やはり高齢者だとちょっと難しいところもあると思う。

議　員）　最後に、皆さんが期待する山梨のお話も伺ったが、今日は、貴重な意見をいろいろと本当に伺わせていただいた。委員からも、いろいろと話があったと思うが、皆さんにとっても、参考になるような話が、一つか二つでもあればいいなと思う。

　また、今後ともぜひ、山梨のことを忘れずに、県外に出ていく方は、一生懸命仕事を頑張っていただきたいと思う。

※　意見交換会の様子

（２）【米倉山電力貯蔵技術研究サイト】

○調査内容（主な質疑）

問）　ＮＥＤＯの事業で、エクセルギー・パワー・システムズという県内の製造企業が、今後、アイルランドにおいて電力供給バランスの調整を行う事業を実施するということだが、具体的にどのような事業か。

答）　アイルランドをはじめ北欧では、太陽光発電とともに風力発電のほうが非常に発達をしている。したがって、再生可能エネルギーなので、日本よりもはるかに出力変動の激しい電力事情がある。電力系統の安定化ということが日本よりも進んでいるということで、こういった対策を日本より先駆けて行っているようである。

問）　超電導フライホイールの蓄電システムの開発のＪＲ側との研究という部分で、平成３２年度中に県内で実証実験が実施されるということであるが、可能な範囲で説明いただきたい。

答）　回生制動で直流モーターが制御、発電することによって電車のブレーキをかけるわけであるが、そうした面から言えば、立地上、かなり傾斜があるところで、甲府よりは北のほうということはわかっている。間もなくＪＲのほうで発表するのではないか。

答）　中央線沿いを、今、検討している。

問）　ハイブリッド水素電池システムというのは、今後、どういうことに使われていくのか。

答）　当初は変動する再生可能エネルギーの、いわゆるフライホイールでものすごく尖鋭化するところを吸収して、ハイブリットだともっと中ぐらいのところを吸収する予定で研究開発を進めたが、フライホイールと同じように尖鋭する部分にもかなり効果があるようだ。したがって、いわゆる系統の安定化技術をヨーロッパでやったのに参加することから始まると考えられるが、日本の電力事情だと、まだそこまで切迫しているような状況ではないので、今後、数年後ぐらいにそういった需要がまたあらわれてくると考えている。

問）　この再生エネルギーと蓄電システムというのが、今後、防災に対して非常に有効になってくるのではないかと思うが、そういう観点から、いかに家庭や事業所に蓄電システムを普及させていくか、その辺の防災に対する再生可能と蓄電の重要性というものに対しての考え方を教えていただきたい。

答）　北海道の地震のときも、太陽光発電を自立モードにして、そこから電力を使ったといったこともあるが、自立モードで運転する場合は、やはり夜間はできないので、それに蓄電池を加えれば、夜間もバッテリーのほうが供給が可能になるため、１日通して使うことが可能になる。

　もう一つ、バッテリーの普及であるが、バッテリーそのものはかなりの面積というか、体積が必要であるため、この部分が今後どれくらいコンパクトになっていくかや、価格がどれくらい安くなるか、こういったことが鍵になってくるだろう思う。コンパクト化できて価格が安くなれば、非常に防災上も有効な手段として広がっていくのではないかと考えている。

問）　その辺の研究などは、ここでは取り組むことはないのか。

答）　改良型の部分についてここで研究しているので、コストダウンという面からすると、もう市場に出回っているものについて先頭を切ってそういった研究がされていくのだろうと考えている。こちらのほうではそういうこととは別に、もう少し大規模に、いわゆる社会資本というか、そういったものに貢献できる研究のほうを進めているところである。

問）　全体的に見て、４４．７ヘクタールのうち約半分強ぐらいが現在のところ活用されているということであるが、この保有地全体の今後の計画としては、東京電力を含め、あとの残りの面積について何か具体的な構想というか、検討が継続的に進められているのか。

答）　現在、平地として整備している部分については、太陽光パネルのほうを敷いてあるが、実はこのほかに既に林になったものなどいろいろあり、まだ３割、４割方残っている状況である。そういう面積をカバーするほどのものがパッと出てくるかというと、正直なところ、なかなか出てこないと思う。ただ、荒れ地にしておくわけにもいかないので、何らかの、例えば倒木等が発生したら速やかに撤去をするとかといったことで、当面は管理をしていく。

問）　たくさんの投資を、県費を持ってきたので、少しでも、今後、軌道へ乗ったら、賃貸料というか、土地代に還元してもらえるような、そういう東京電力との交渉を長い目で取り組む必要があるのではないかという議論を展開させてもらったことが記憶にあるが、この事業が現状かなり予定どおり軌道に乗っているのかどうか、それから軌道に乗っているとしたら、そういう課題について継続的に取り組んだり、あるいは検討する方向があるのかどうか教えていただきたい。

答）　ＮＥＤＯのほうに新たな事業展開ということでＰ２Ｇ事業、これを今年の１２月に申請して、次の現地審査が通ると、今の太陽光発電で電気を起こす、それと水素をつくる、こういった仕組みを、今、模索中である。この研究は、四、五年かかるが、うまくいくと、山梨の水素社会、ここで水素をつくって、水素を供給していくということも考えられるので、そうするとここのエリア、少し拡張したりということで、具体的に将来像はまだ相当先の話で、東京電力との契約もあるので、それが切れるときにどうするのかというところもある。大変申しわけないが、その先まではまだまだ検討はしていないが、当面、ここでパワー・ツー・ガスや、エクセルギーの事業、ＨｙＳＵＴの事業、これをどううまく展開していくかというところを、今、研究中であるので、その成果によりまた、広大な土地なので、利用価値というのを高めていきたいと現状では思っている。

※　概要説明を受け、質疑を行った後、施設の視察を行った。